

2009年8月4日 現地講義

フィールドワークの到達点

山田勇（京都大学東南アジア研究所）

講義の導入：スイバとは 講義は、まずはスイバの説明から始まった。

ここでのスイバとは、普通の場所ではなく、少数の隠れ場であり、いやしの場、そして、聖・カミ的なものへの接点となるような空間のことだという。これだけ聞いた時、一体どのような場所が想像できるだろうか？先生は、具体的に子供の頃の秘密の隠れ場、別荘、カトリック大聖堂のような場所を例にあげながらスイバと巡礼地・ゴンパとの共通点・違いを比較していった。先生にとってのフィールドワークの目的とはスイバ探しでもあるという。つまりは、先生は、秘密の隠れ場を探し続けていることになるのだろうか？

秘密の隠れ場から世界へ

先生のスイバ探しの旅は、その原点である子供の頃の秘密の隠れ場のある京都から、東南アジア諸国へ移っていく。先生の研究の足跡を辿るような形で、バリ・ブルネイ・ミャンマー・ラオスなどの東南アジアのスイバの紹介をしながら講義は進められた。そして、スイバから生態資源へ話題は広がり、特に重要な森林資源の一つ沈香の利用とその流通に注目する。後半では、長年東南アジアを専門に研究してきた先生が、より東南アジアを知るために世界各国の地域を知ることの重要性を述べ、世界の森と人とのつながり、そしてその資源利用の変容と今後の展望へと話題を広げていった。

フィールドワーカーの到着点と心得

このように世界各国でフィールドワークを行ってきた先生にとって、フィールドワークの到達点とはスイバへの回帰であるという。つまりは、精神世界の充実、そして秘密の隠れ場所を探し、作り上げていくような子供の感性でいることなのだろうか？今回ウジュンクロン国立公園では、先生のスイバ（秘密の隠れ場）ともいえる場所に連れて行って頂いた。天然のトイレである。確かに、高さといい足の踏み場の間隔といい、良い塩梅である。先生は実に嬉しそうであった。1968年に日本人研究者として、このウジュンクロン国立公園に初めて滞在したのが山田先生であり、今回先生は実に41年ぶりにこの天然トイレへ戻って来た事になるのだ。最後は、これからフィールドワークを始める私たちへ先生から一言。フィールドワーカーは、まず体力、そして興味と広い視野を持ちながらも侵入者としての自己認識を忘れない事が大切とのアドバイスを頂いて講義は終了した。



子供時代の先生の秘密の隠れ場



ウジュンクロン国立公園の秘密の場所

（記録：古川文美子）